

天の声に耳傾けて

真青な宙に湧雲。真朱な夕に鱗雲。真暗な空に月暈。暑い暑いと、天を見上げたからかもしれない。宇宙の不思議を思った。天は力強く美しく、しかし、時には凄まじい嵐や大洪水、雪をももたらす。私たちは日々天の声に耳傾け、自然の声を聞きながら、生きる。

そんな夏を迎え始めたころ、邑の映画会は本格的に動き始めた。昨年1本の映画は決めていた。それは、足利市出身谷津賢二監督製作、ドキュメンタリー映画劇場版『荒野に希望の灯をともし』である。パキスタン、アフガニスタンに生きた中村哲が、何処と繋がり、何を生きたか。それは、何なのか。ペンシャワールへ赴いたその日本人医師が、なぜ1600本もの井戸を掘り、25.5キロにもおよぶ用水路を拓くに至ったのか。「困っている人がいたら手を差し伸べる—それは普通のことです」と。「健康で命があること、三度、三度、ご飯が食べられること、家族と一緒にいられること、そういう中で暮らしていて、まあ、むこうふうになってくるわけですね」とも言う。

組み立てたもう一本の映画は、これ！と決めた。高畑勲監督が彼の哲学をもって5年の歳月をかけて製作したアニメーション映画「セロ弾きのゴーシュ」ゴーシュは難題に向かいながら生きていく。ゴーシュたちが映画全編において奏でるベートーベン作曲交響曲第6番『田園』の音楽も、心ゆくまで楽しんでいただきたい。映画は先行する藝術を含んで、豊かである。自然や命の根源に立ち返ることとしても、子どもたちに届けたい。

小栗康平監督から「いい番組になってよかったですね」とメッセージが届いています。明りを消して、一みんな映画を見る。映画で出会う—どうぞ、秋の一日をお楽しみください。

邑の映画会実行委員会会長 アーティスト・ディレクター 加藤 一枝

最高の映画で心に残る一日を

映画を初めて見た場所は、地区の集会所だった。

あれは小学校の1年生か2年生の夏の終わり頃だったと思う。誰からだったか覚えていないが、「今日の日曜日の夜、集会所で映画会をやる」という話を聞いた。近所の遊び仲間に「行くの？」と尋ねると、皆「行くよ」と言っていた。

当日の夜6時頃だっただろうか。薄暗がりの中を家の人と一緒に出かけた。近所の仲間たちも皆、家の人と一緒に来ていた。

敷かれたむしろ(?)の上には、大人と子どもがぎっしりと座っていた。今か今かと待っていると、男の人が何かの説明を始めた。しばらくして電気が消され、カタカタカタという映写機の音とともに、目の前の白い布のスクリーンに映像が映し出されてきた。

何の映画だったのか、どれくらいの長さだったのか今では全く記憶が無い。しかしスクリーンに映し出された映像が、家のテレビの画面よりも大きく迫力があつたので、圧倒されて胸がドキドキしたことを覚えている。夏の終わりの一夜、仲間たちと時間と場と空気を共有して得た一体感のようなものは、50年以上経った今でも、かけがえのない思い出となっている。

社会が複雑化し、価値観も多様化している今日、学校以外の場で、子供たちが時間と場と空気を共有する場面は少なくなってきた。

「邑の映画会」は、今年度14回目を迎える。場所は今年も「邑の森ホール」だ。最高の映画を、最高の視聴環境の中で観ることができるすばらしい機会である。大勢の方々と時間と場と空気を共有して、心に残る秋日を過ごしていただきたい。

邑楽町教育委員会教育長 小林 淳一

邑の映画会 vol.14 開催によせて

今日は邑の映画会 Vol.14 にお越しいただき、誠にありがとうございます。皆さまと共に映画を見るという素晴らしい機会を私自身非常に楽しみにしております。

さて2008年に開始した邑の映画会ですが、今年で17年目を迎えました。

ここで大変恐縮ですが、少しでも私の話をさせていただきます。私自身第一回から子どもボランティアとして携わらせていただいています。当時小学校3年生でした。中野東小学校では映像教育の一環として、加藤さんと高橋先生がお昼休みに視聴覚室で映画を流していて、楽しみに通っていた事を今でも鮮明に覚えています。それがきっかけで邑の映画会に携わらせていただこうになるわけですが、そんな私も17年の時が経ち、25歳となりました。

私は高校卒業後、福島県の大学に進学し、現在は神奈川県横浜市で就職し、生活をしています。

小学3年生だった私も高校卒業をきっかけに県外で一人暮らしをし、今では社会人として働き、家庭を持つようになりました。そうなるに年数度しか、はたまた数年に一度しか帰省できないというのが大多数です。私も例外では有りませんでした。知り合いがほとんどいない土地、社会人として求められる行動と責任、コロナ渦やVUCA時代という社会の変化。多くの波に抗うべく、仕事に家事に無我夢中で、地元に戻りゆっくりする。そんな時間を取ることもさまままならなかったです。

そんな中でも私は11月頭の三連休は必ず毎年邑楽町に帰っています。そう、邑の映画会開催のためです。

そして昨年から子どもボランティアとしてではなく、社会人になり、実行委員として運営を考えるようになりました。私は高校から県外に住み、年に3,4度ほどの帰省はしますが、その間は家族と過ごすという生活の中で、地元である邑楽という地域とのつながりが薄れてきてしまっていると感じます。そんな中でも私にとっての邑楽という地域との繋がりが邑の映画会です。映画を見るという共通の目的のため、多くの方が協力して準備を進め、そして多くの方と同じ空間、同じ時間、同じ視点を共有する。その中で私はこの邑楽という土地、映画を見たいと集まってくださったみなさまとの繋がりを再確認することができています。

「映画」という一つのコンテンツが年齢、土地、世代を越えて人と人、人と地域を繋げてくれる。それが私の13回もの映画会の開催を通して学んだ事であり、少しでもみなさまに感じてほしいと願っています。

邑の映画会実行委員 吉永和起